

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463418

研究課題名(和文) 乳がん患者の配偶者の役割認知を促す看護介入プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) The development and evaluation of a nursing intervention program to promote the role recognition of spouses of breast cancer patients

研究代表者

菅原 よしえ (sugawara, yoshie)

宮城大学・看護学部・教授

研究者番号：60315570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、妻の乳がん治療において配偶者が役割を認識できるような看護介入を開発し、その有効性を評価することであった。研究デザインは、乳がん患者の配偶者に対して役割認知を促す看護介入を開発し、その有効性を評価する看護介入研究である。結果、適用群では緊張、抑うつ、怒り、疲労、混乱の値が低下し、ポジティブな気分状態である活気が高くなり、自尊心が高くなった。本プログラムは乳がん治療に取り組む妻を支える配偶者の心理的安定を図り、配偶者としての役割を認知させることを促すと考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to improve the mental health of spouses of breast cancer patients, develop a nursing intervention program that helps them recognize their roles, and evaluate its effectiveness.

The study design was a nursing intervention study to develop nursing interventions that promote the role recognition in spouses of breast cancer patients, and then to evaluate the effectiveness of those interventions.

The results of POMS and RSES showed decreased negative mood states and increased positive mood states in the intervention group. Self-esteem was also elevated in this group. This suggests that the program may serve to stabilize mood and raise self-esteem in spouses of breast cancer patients.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がん 配偶者 看護介入 役割

### 1. 研究開始当初の背景

がん罹患率は増加傾向であり、女性のがん罹患率の第1位は乳がんとなっている<sup>1)</sup>。乳がん患者が乳がん診断後の精神的な動揺に対処し、治療選択などに取り組むには、家族の支援を得られることが重要である<sup>2)3)</sup>。これまでの乳がん患者を対象とした研究では、情報提供、意思決定の支援、生活面の援助、患者の情緒的支援と多くの役割が配偶者へ期待されていた<sup>4)-6)</sup>。乳がん患者の配偶者を対象とした研究では、配偶者の心理的側面に焦点をあてた研究がおこなわれ、抑うつが患者だけでなく配偶者にも同等の割合で認められること<sup>7)8)</sup>から家族に対する医療者のアプローチの必要性が指摘されている。がん患者の心理支援として、保坂ら<sup>9)</sup>により、がん患者および家族のためのグループ療法による心理的支援を開発されている。しかし、専門スタッフがいないことや、乳がん患者の配偶者が仕事の時間を調整しグループ療法に参加しにくい等の理由で普及が難しい状況にあり、個別のアプローチが必要ではないかと思われる。

配偶者が乳がんを患った妻に対してどのように対応しているかに関する研究では、配偶者は妻を刺激しないよう見守る対応を多くとっていたが、患者である妻の苦痛が大きい場合に妻には、配偶者からのサポートとして認識されていなかったことの報告がされている<sup>10)</sup>。また、山崎の報告<sup>11)</sup>では配偶者は乳がんを患った妻に対して共感し寄り添う気持ちを強くもっていることが明らかにされ、課題として配偶者自身の支援者が少ないことがあげられている。以上、これまでの研究報告から、乳がん患者の配偶者は患者の重要な支援者として期待され、配偶者も患者を気づかっているが、配偶者自身の心理的な負担や配偶者への支援がないことが課題であると考えられた。

そこで、研究代表者は、平成23年に乳が

ん患者の配偶者が、妻の乳がん診断と初回治療の期間において、どのような認識を持ち、対処しているかを明らかにするために質的記述的研究を行った。その結果、配偶者は妻をサポートする役割を果たしたいと思いつつながら、関わりにくい側面があり、妻の状態を理解できない状況にあることがわかった。このことは、配偶者が疎外感や無力感を感じ、配偶者の心理的落ち込みや自尊感情の低下を招きやすい状態にあると考えられた。

以上のことから、乳がん患者の配偶者の支援には配偶者自身の心理的安定を図るとともに、妻の乳がん治療における配偶者の役割を認識できるような看護介入が必要であると考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、乳がん患者の配偶者自身の心理的安定を図るとともに、妻の乳がん治療における配偶者の役割を認識できるような看護介入を開発し、その有効性を評価することである。

### 3. 研究の方法

研究デザインは、乳がん患者の配偶者に対して役割認知を促す看護介入を開発し、その有効性を評価する看護介入研究である。まず、乳がん患者の配偶者の認識に関する質的研究をもとに、配偶者の役割認知を促す看護介入プログラムを開発した。開発した看護介入プログラムを乳がん患者の配偶者を対象者として実施し、評価を行った。評価指標には気分プロフィール検査日本語版(Profile of Mood States, 以下POMSとする)<sup>12)</sup>と、Rosenberg 自尊感情尺度日本語版(以下、自尊感情尺度とする)<sup>13)</sup>を使用した。さらに、半構成的面接法により、対象者の状況に対する認識および配偶者としての役割に関する認識を把握した。評価方法は、通常の看護を受けている乳がん患

者の配偶者を非適用群とし、開発した看護介入プログラムを実施した配偶者を適用群とした2群についてデータ収集を行い、比較検討した。非適用群、適用群ともPOMSと自尊感情尺度については、初回治療前（介入前）、初回治療直後（介入直後）、初回治療1か月後（介入1か月後）の3回のデータ収集を行った。半構成的な面接による質的データについては、初回治療前（介入前）、初回治療1か月後（介入1か月後）の2回のデータ収集を行った。POMSと自尊感情尺度の分析方法は、各項目の3回の得点について反復測定一元配置分散分析を行った。また、非適用群と適用群について二元配置分散分析を行った。有意水準を $p < 0.05$ とした。半構成的な面接による質的データの分析方法は、内容分析法を用いて対象者の状況に対する認識および配偶者としての役割に関する認識について、介入前後の違いを検討した。研究にあたり所属機関の倫理委員会の承認を受け、対象者の人権擁護を厳守した。

#### 4. 研究成果

(1) 結果：非適用群16例、適用群16例の協力が得られた。POMSの各項目および自尊感情尺度は、非適用群では3回の得点に有意差は認められなかった。適用群では、3回の得点に有意差が認められた。適用群では、POMSの緊張、抑うつ、怒り、混乱、疲労の項目で得点が低下し、活気得点が上昇した。また、自尊感情尺度の得点が増加した。非適用群と適用群の比較では、POMSの緊張、抑うつ、活気、疲労の項目では適用群において改善の傾向が認められた。怒り、混乱の項目では非適用群と適用群において有意差がなかった。自尊感情尺度では適用群において介入後自尊感情が高まる傾向が認められた。

質的データの分析では、初回治療前の認識について非適用群と適用群で同様の傾向の категорияが抽出された。初回治療1か月後

の非適用群では《妻の闘病に関することがわからない》、《乳がんの知識がないので夫としてできることがわからない》等のカテゴリーが抽出された。初回治療1か月後の適用群では《乳がんや治療に取り組んでいる妻を理解する》、《妻の治療予定など近い将来を把握して妻への支援を検討する》等のカテゴリーが抽出された。

(2) 考察：POMSと自尊感情尺度の結果、適用群ではネガティブな気分状態である緊張、抑うつ、怒り、疲労、混乱の値が低下し、ポジティブな気分状態である活気が高くなり、自尊感情が高くなった。このことから、本プログラムは乳がん患者の配偶者に対して、気分状態を安定させ、自尊感情を高める影響を及ぼすのではないかと考えられた。また、本プログラムに参加した乳がん患者の配偶者は、《乳がんや治療に取り組む妻を理解する》ことが役割であると、配偶者の立場を意識した役割について認識していた。本プログラムの教育的支援を受けることで、乳がん患者の配偶者が、乳がんの治療スケジュールや妻の心理変化を理解できたことが影響したのではないかと考えられた。

以上のことから、本プログラムは乳がん治療に取り組む妻を支える配偶者の心理的安定を図り、配偶者としての役割を認知させることを促すと考えられた。乳がん患者の配偶者に対する診断時期からの個別の支援プログラムは、乳がん患者を支える一員としての配偶者の自覚を促し、乳がん患者の長期にわたる闘病を支える上で意義が大きいと考えられた。

#### <引用文献>

- 1) 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター. 部位別がん粗罹患率の推移. 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター. 2011年1月27日. <http://ganjoho.jp/pro/statistics/>

gdb\_trend.html

- 2) 国府弘子. 初期治療を選択する乳がん患者が経験する困難. 日本がん看護学会雑誌, 2008 ; 22(2) : 24-31.
- 3) 安森由美. 乳房切除患者とその夫のソーシャルサポート内容に関する研究 - 夫のソーシャルサポートを中心に -. 第 27 回日本看護学会集録成人看護 , 1996 : 112-115.
- 4) 国府弘子. 初期治療選択を行う乳がん患者が受けるサポート. 日本がん看護学会雑誌, 2010 ; 24(2) : 14-22.
- 5) 福井里美. 中年期がん患者のソーシャル・サポート・ネットワーク 手術前後のサポーターの内容と変化. 日本看護科学会誌, 2002 ; 22(1) : 33-43.
- 6) 宮下美香. 乳がん患者により知覚されたソーシャル・サポートに関する研究. 看護技術, 2004 ; 50(3) : 242-248.
- 7) 萬谷智之, 佐伯俊成, 山脇成人. がん家族の適応障害. 緩和医療学, 2002 ; 4 : 53-60.
- 8) 佐伯俊成, 山脇成人. 乳がん患者とその家族への精神面でのケア. 臨床看護, 2003 ; 29(7) : 1051-105
- 9) 保坂隆. 東海大式乳がん患者への構造化された集団介入. 緩和医療学, 2003 ; 5 : 8-13.
- 10) Chris Hinnen, Adelita V. Ranchor, Pieter C. Bass, Robbert Sanderma, Mariet Hagedoorn. Partner support and distress in women with breast cancer: The role of patients' awareness of support. Psychology and Health , 2009 ; 24(4) : 439-455.
- 11) 山崎晶子. 乳がん患者と生活を共にするパートナーの心理 . 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 2006 ; (31) : 228-234.
- 12) 横山和仁, 荒木俊一 , 川上憲人, 竹下達也. POMS (気分プロフィール検査) 日本語版

の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌, 1990 ; 37(11) : 913-917.

- 13) 桜井茂男. ローゼンバーグ自尊感情尺度 日本語版の検討. 発達臨床心理学研究, 2000 ; 12 : 65-71.

#### 5 . 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計3件)

— 菅原よしえ, 森一恵: The effects of nursing intervention on the spouses of breast cancer patients

— Mood and self-esteem state assessment-based analysis-, 4th World Academy of Nursing Science , 2015 年 10 月 15 日, ハノーバー(ドイツ)

— 菅原よしえ, 森一恵: 乳がん患者の初回治療時期における配偶者の役割認識の変化, 第 29 回日本がん看護学会学術集会, 2015 年 2 月 28 日, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

— 菅原よしえ, 森一恵: 乳がん患者の配偶者の心理面の経時的変化—気分と自尊感情状態の調査から—, 第 7 回岩手看護学会学術集会, 2014 年 10 月 18 日, 岩手県立大学(岩手県・滝沢市)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

菅原 よしえ (SUGAWARA, Yoshie)

宮城大学・看護学群・教授

研究者番号：60315570

### (2) 研究分担者

森 一恵 (MORI, Kazue)

聖隷クリストファー大学・看護学部・教授

研究者番号：10210113

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )